

---

# 還る森

クロワッサン

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

還る森

### 【Nコード】

N0614M

### 【作者名】

クロワッサン

### 【あらすじ】

その森は《還る森》と呼ばれている。

万緑の森林を一望できる小高い丘の上に、少年と少女が寄り添うように座っていた。二人の間に少しだけ開いた距離は、気恥ずかしさによるものだろうか。

二人が見下ろしている森林は、還る森と呼ばれている。一つの巨大な森の中には、川が有り、池が有る。生き物が死に、生まれ、食い食われる。その森の中だけで自然は完全に循環していた。

「ねえクトアタ、この山の向こうには、何があるの？」

少女 ルーアイは。歌うように呟いて首をかしげた。絹糸のような長い金髪が、その動作に合わせてふわりと浮いた。不純物の無い琥珀色の瞳には、穢れを知らない透明さがある。

問いかけられた銀髪の少年は、参ったな、と言う様な苦笑いを浮かべた。

「どうしてそんなことを聞くの、ルーアイ？」

「だって、ほら」

ルーアイはそう言って空の一点を指差した。白くて細い人差し指の先には、遠くの山の方へと向かって力強く羽ばたいている一匹の鳥。

「きつと、あの山の向こうにはフクロウさんの住処があると思ってきつと、楽しい所よ」

満面の笑みを浮かべてフクロウに手を振るルーアイを、クトアタは静かに見つめていた。

やがてその口を開いて、

「僕もいつか、山の先に行きたいよ」

「行けばいいのに」

ルーアイの返答に、クトアタの顔から苦笑いが消えた。冷徹な氷のような瞳は、どこか悲しげな色をたたえている。

「それは駄目さ、ルーアイ。山を越えてはいけないうて、みんな言  
つてただろう？」

特に長老は、ルーアイが外の世界について尋ねる度に、「出られ  
ると思わない方がいい」と脅迫めいたことを言っていた。

悟ったように語るクトアタを、ルーアイは不思議そうな顔で見つ  
めていた。

「一曲、聴いてくれ」

ふと、クトアタは周りに落ちている草の中から、細くて長いもの  
を選ぶと、口に押し当てた。美しい草笛の音が、辺りに響き渡る。

深淵の夜空に描かれているのは、黄金と黄土で彩られた極彩の正  
円。煌々と輝くその光は、風に応えて揺れる草木を優しく包み込んで  
いた。

樹齢千年を越える大きな大きなご神木の根元で、ルーアイは一人  
歌っていた。透き通った声が奏でる旋律は、寝静まった広い森に響  
くことは無かった。

ルーアイはくると踊りながら、ゆっくりと移動していく。沈  
黙に支配された草原で孤独な演技を続けている。いつもなら、ルー  
アイの後を追って揺れている筈の銀髪が、そこには無かった。

ふと、ルーアイは立ち止まって一片も欠けることの無い満月を見  
上げる。

（お月様が丸いのは久しぶり。きっと今夜は、機嫌がいいんだわ）

ルーアイは微笑むと、踊るのを止めて歩き始めた。フクロウの消  
えた山の方へ。

耳を澄ませば、楽しそうに笑う虫の声が聞こえてくる。背の丈の  
低い草を踏み分けるたび、小さな虫がルーアイの腰のあたりまで飛  
び上がった。

（クトアタの草笛と、どっちが綺麗かしら）

クトアタの幻想的な草笛を思い出して、ルーアイは彼の吹く曲と

同じ旋律に即興の詞を乗せて歌った。先ほどとは違う振り付けで踊りながら、美しいステップを踏む。そのままの調子で、時間をかけて長い長い草原を渡りきった。

ルーアイは、草原の端まで来て歌うのを止めた。もう少しで山のふもとと言っ場所、その足を止め、

「こんばんわ」

何も無い闇の空間へ向けて、丁寧に頭を下げた。

痛いぐらい静かな沈黙。一方向を見つめるルーアイの前に、銀髪の少年が現れる。

「ルーアイ、何処へ行くんだい？」

クトアタの顔には、いつもの苦笑いが浮かんでいた。しかし、いつもと違ってその笑みは張り付いたようで、温かみはどこかに置き忘れてしまったかのようにだった。

「貴方の元に」

悪戯っぽく囁くルーアイに、クトアタは苦笑いを消した。

背後の森の中から、山へと続く道の両側にある崖の上から、冷たい殺気が束となって二人の方へと押し寄せる。

「女の子は貴重なんだ、ルーアイ。もう此処には、僕達には君しかないんだ……」

クトアタたちの部族には、女がほとんど生まれない。女の生まれる割合は、二十人に一人か、それよりもっと低い。ルーアイの、クトアタの ひいては此処に生きる若者ほぼ全ての 母 だった人物は、数年前に死の床に伏した。

死因はたび重なる高齢出産だった。子作りの為の道具として扱われた 母 は、最後にルーアイを生んで息絶えた。

「はい。でも私は物じゃないんです」

ルーアイは、いつもと変わらない微笑みを浮かべる。

「悪いようにはしない……だから、残ってくれ。頼む、もう直ぐなんだ」

部族の女は、十五になったら子を産むのがしきたりだった。殺し

合って残った十人の男と結婚し、次の世代を繋げてゆく。戦いは既に始まっていて、子作りの儀式はもうすぐだった。

「選択肢が無いのなら、逃げるしか無いんです」

「そうか」

クトアタは黙って剣の柄に手をかける。手が震えているのか、剣が鞘に当たってカタカタという音を立てている。

「頼むよ、ルーアイ」

クトアタの声は、剣以上に震えていた。何かに対して恐怖心を抱いていることは傍から見ても明らかだった。

「長老たちは、殺せって言ってましたか？」

ルーアイの質問に、クトアタは直ぐは返事を返せなかった。

「……………いいや。子供さえ生めればいいから、その状態にまでならしてもいい、といわれたよ」

「子供が生めればなんでもいいのね。長老は『女は道具』っていつも言ってたもの」

ルーアイの言葉にクトアタは苦しそうに顔をゆがめる。

「クトアタ、長老に言っておいて。閉鎖的に生きてたら駄目。外の世界に出ないと問題は解決しないって」

「……………分かった」

「さ、剣を抜いて。私は抵抗するから」

ルーアイは足元に落ちていた短い棒切れを拾った。

クトアタは苦渋の表情で剣を引き抜いた。銀色の刃が黄金を受けて白い光を放つ。

「クトアタ」

剣を構えたクトアタが走り始める。ルーアイは変わらぬ笑みを浮かべていた。

「貴方のこと、好きよ」

「……………分からないよ」

クトアタはルーアイの真横を通り過ぎながら白刃を振りぬいた。

ルーアイの背後の木の裏に隠れていた男の一人が悲鳴を上げる。

「森から出るよ」

「……少しだけ、そういう夢を見てた。救ってくれるんじゃないかって」

「三日後ならともかく、今日は厳しいよ」

衝撃的なクトアタの行動に反応が遅れていた男達が、一斉に咆哮しながら二人の方へと襲い掛かってくる。

クトアタはルーアイの手を強く握ると、山のふもとに向けて走っていった。震えていた手は、ルーアイに触れたときから止まっていた。

「だから、言っただじゃないか……悪いようにはしないって。あと三日間待つてくれれば、僕は君を……」

入るのを禁じられた山の中腹に、クトアタとルーアイの二人はいた。クトアタは、岩にもたれかかっているルーアイを見つめていた。子作りの儀式の直前。最後の十人が選ばれたときであれば、あるいはクトアタはもっと簡単に切り抜けられていたのかもしれない。現実には、木々の間に隠れ、迂闊にルーアイの事を攻撃できない男達の心理を利用し、ルーアイを盾にしながらでの泥試合というものだった。

もちろんクトアタには、ルーアイを盾にする気など毛頭なかった。ただ、クトアタが何を言おうが、ルーアイは自分と相対した男との間に飛び込んでくる。

「……ルーアイ」

もっと早く脱出計画を伝えておけばよかった、とクトアタは思った。ただ、どこに行っても男たちが耳をそばだてていて、ルーアイにそれを伝える時間はなかった。

クトアタは、片腕を失い腹を貫かれたルーアイを抱き上げる。大粒の涙がたくさん落ちて、ルーアイの服に丸い染みを作った。

彼らにとって、ルーアイは無くてはならなかった存在だった。ル

ーアイは殺してはいけないが、しかし躊躇っけていてはクトアタに殺される。

ならばあの時、闇夜に紛れながらの奇襲戦で男を全員殺せば良かったのだろうか。

無残な格好になりながらも、口元にはいつもと変わらない安らかな笑みを浮かべていた。

クトアタは、母のことを思い出していた。森の外から、旅をしてやってきた母は、どうしてこんな酷い場所にとどまる道を選んだのだろうか。

そこまで考えてクトアタは、妄想を振り払うかのように首を振った。結果が出た後での仮定など、何の意味も無い。

動かないルーアイを強く抱きしめながら、きつい斜面を登っていく。足は過負荷に絶叫していて、今にも引き千切れそうだったが、精神力で何とか痛みを押さえつけた。

『あの山の向こうにはフクロウさんの住処があると思って』

ルーアイの美しい声がクトアタの頭の中に響いていた。それだけを頼りに、クトアタは足を引き摺るようにしながらも上へ、上へと登っていく。頭上には雲ひとつ無い青い空が広がっていた。

ただ、生まれた瞬間から出ることを固く禁じられた外の世界をルーアイが思いを馳せていた、外側の世界を見てみたかった。

「つい、たよ……ルーア………」

目の前に広がる世界に、クトアタの言葉が止まる。

フクロウが、あの日と同じ方角の空へと消えていくところだった。クトアタはフクロウが夜行性であることを思い出していた。

細長い枯れ葉が、風に吹き飛ばされて広大な森林の方へと吹き飛んでいった。

頭上で羽の音がして、クトアタの足元に何かが落ちる。墜落してきたフクロウが草の中でもがいていた。もはや昼夜の判別などついていのだろうか。

抱えていたルーアイが腕から滑り落ちる。死体は地面にぶつかっ



て、小さく鈍い音を立てた。

『きつと、楽しい所よ』

「……っははははははは！」

クトアタは高らかに笑いながら、剣を自分の腹に突き刺した。

二人が倒れている森林は、　還る森　と呼ばれていた。

（後書き）

Q ・なにこれ？

A ・多感な中学生時代に書いた謎作品です。

Q ・なぜ掲載した？

A ・一作取り下げたら掲載小説欄が寂しくなったからです。

Q ・ラストが意味分らないです

A ・フクロウとタイトルに注意してみて読むとわかるかもしれません。

もっと分かりやすく言うとゼル伝の迷いの森です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0614m/>

---

還る森

2011年10月7日06時40分発行